

問題中の字数制限は、すべて句読点、記号等をふくみます。

一 次の各——について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- (1) 在庫商品をレンカで販売する。
- (2) 万が一に備え、万全のソチを取る。
- (3) ノルウェーはホクオウの国だ。
- (4) 鉛筆を小刀でケズる。
- (5) エアコンの敷設工事が始まる。

二 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

交換というと、何を考えますか。たぶん、物と物の交換でしょう。あるいは、物とサービス、ないし、サービスとサービスの交換です。面倒なので、以後、「物」としかいいませんが。このような交換は、自分が必要でないものを相手に与え、自分の必要なものを代わりに受けとることです。こういう交換の仕方を、交換様式Cと呼ぶことにします。

今述べたのは、物と物の交換ですが、現在では、物々交換はほとんど見られません。通常は、売買、つまり、物と貨幣の交換がなされる。しかし、物と貨幣の交換を歴史的に遡ると、物と物の交換になります。貨幣はそこから生まれてきたのです。ある物と他の物の交換比率が決まっているところでは、ある一つの物が

事実上、貨幣として扱われます。

【Ⅰ】、かつて遊牧民は、羊を放牧しながら旅をして、羊と各地の物を交換した。その場合、羊が貨幣なのです。現在でも、貨幣がないときは、米や石油が貨幣として用いられます。物々交換であれ、売買であれ、このような交換様式Cの特徴は、交換が互いの合意によってなされることです。——(ア)

【Ⅱ】、交換の中には、①それと違ったタイプがあります。例えば、誰かがあなたに物を贈る、とします。ギフトをもらうと何か、負い目を感じます。お返しをしなければならないという気持ちになる。そして、実際にお返しをする。すると、結果的に、物と物を交換したことになりますが、これは、先に言った交換様式Cとは異なります。このような、贈与とお返しという交換の仕方を、私は交換様式Aと呼ぶことにしています。

なぜAなのか、といえば、これはある意味で、Cに先立つものであり、最も古い交換様式であるからです。今やこれは、交換様式Cの下に目立たなくあるだけです。しかし、今も実は、強い働きをしています。例えば、家の中で、皆さんは、親子・兄弟・姉妹との間で物やサービスの交換をするでしょうが、それは、売買すなわち、交換様式Cではなくて、「贈与—お返し」、【Ⅲ】、Aだと思えます。例えば、親は子供の面倒を見ます。それに対して、子供は別にお返しをする必要はないし、実際しないけれども、将来的には、恩を感じる、つまり「借り」を感じるでしょう。であれば、これは交換なのです。——(イ)

現在の社会では、贈与とお返しという交換は、主要な形態ではありません。だから、あまり多くは見られません。が、未開社会では、②これが主要な交換形態でした。このような贈与とお返しという交換様式を、<sup>注1</sup>マルセル・モースという人類学者が互酬

性（レシプロシティ）と呼びました。これが、未開社会の根本的な原理だと、彼はいうのです。

贈与にはいろいろな効果がありますが、その一つは、他の集団と友好的な関係を創ることです。例えば、遊動的な狩猟採集民は、小さなバンド（小集団）でジャングルの中を移動しているのですが、別のバンドに突然出会うことがある。それは互いに、恐怖なのです。その場合、彼らはまず、贈与する。それによって、平和状態を創るわけです。

とにかく、贈与されたら、それに対してお返しをしなければならぬ。それが交換様式Aです。例えば、皆さんの家にはお中元やお歳暮が届くことがあるでしょう。その場合、必ずしもお返しをするわけではない。ただ、気には留め<sup>と</sup>ます。何かがあったときに、送ってくれた人を優先しようという気になる。少なくとも

それは、服従と保護というような交換です。ある者に服従する代わりに、その保護を受ける。私は、これを交換様式Bと呼びます。歴史的には、Aの後に出てきたものだから。このような交換は、ふつう、交換とはみなされません。というのは、この交換の根底に、暴力あるいは暴力的強制があるからです。しかし、これは一時的な暴力あるいは略奪とは違います。服従する側にも、一定の見返りがあるのです。

注1 マルセル・モース：一八七二～一九五〇年。フランスの社会学者・

問一 「Ⅰ」～「Ⅳ」にあてはまる語として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア すなわち      イ だから  
ウ 例えば      エ しかし

問二 ——— ①「それ」・②「これ」は「交換様式」のA～Cのうちどれにあたるか、それぞれ記号で答えなさい。

問三 ——— ③「互酬は必ずしも平和的なものだと決まっています」>と言えるのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 狩猟採集民が別のバンドに突然出会うのは、互いの集団にとって恐怖を感じるものだから。  
イ 贈与に関する三つの命令を守らないと、崇りがあつて必ず恐ろしいことになるから。  
ウ 相手に返せないような負い目を与えるほど、多くの贈与をする破壊的なものもあるから。  
エ 贈与に対して見返りを求めることは、お互いの不満をつのらせる結果になってしまうから。

問四 ④ に入れるのに適当な語を本文中から漢字三字で探し、抜き出して答えなさい。

問五 ——— 「これは、先に言った交換様式Cとは異なり、まず」について、「交換様式C」の特徴を説明した次の文の空欄にあてはまる語句を、本文中の表現を用いて三十字以内で答えなさい。

自分には必要のないものを [ ] が交換様式Cである。

問六 次の文は本文中の(ア)～(エ)のどの部分にあてはめるのが最も適当か、記号で答えなさい。

ただし、交換様式Aです。

問七 本文の内容に合うものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 遊牧民は各地の貨幣と羊を交換しないと、それぞれの地域の物を買うことができなかった。  
イ 親は子供の面倒を見るが子供は親に対してお返しをしないので、交換と呼ぶことはできない。  
ウ 現代社会では贈与とお返しという交換は主要な形態ではないので、多くは見ることがない。  
エ 服従と保護の交換には服従する側の見返りがないので、ふつうは交換とはみなされない。

### 三 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

大学で工学を学んでいた聡一<sup>そういち</sup>は、戦争で父を亡くし一家を支えるために大学をやめ、鉄道総局の研究所に入所した。そこでは軍出身の技術者たちが新しい列車の開発に取り組んでいた。ある日、列車開発のための実験に参加し片付けを終えた聡一は、月を見上げてたえず木崎<sup>きさき</sup>を見つけた。

「木崎さん」

聡一は思い切ってかけよった。

「お疲れさまでした」

普段ならば、自分から声をかけるのも①はばかりのような相手だが、体が勝手に動いてしまった。

近寄りがたいばかりだった木崎が、今日はぐっと近くに感じられた。②曲がりなりにも一緒に実験をやった一体感のようなものが、聡一の体を満たしていた。

「ああ、ごくろうさま」

あにはからんや、木崎も穏やかな声で返してくれた。

「思いのほかいい数値が取れた。きみの模型のおかげだ」

「そんな」

褒め言葉までかけてくれ、恐縮してしまったが木崎は笑顔だった。

「これからこの模型を基に、モノコック構造の模型をつくり、さらに実験を深める」

「モノコック構造？」

「ああ。全部を同じ軽い素材でつくり、全体で強度を持たせる構造だ。今の鉄道車両よりもずっと軽量化が見込める。飛行機に使

う構造だ」

飛行機！

聡一はつい、興奮して言葉を続けた。

「そういえば、木崎さんは、<sup>注1</sup>零戦<sup>ぜろせん</sup>をつくっていたんだそうですね。<sup>注2</sup>桜花<sup>おうか</sup>とか有名な……」

「……」

だが、質問の途中で木崎の顔から笑みが消え、③聡一は焦った。なにか不用意な発言だっただろうか。

途中で言葉を引っ込めて、自分の発言を検証していると、木崎が低く返事をした。

「……ああ」

軽くうなずき、しばらく黙ったのち、ひび割れたような声を出した。

「正確に言えば零戦ではないが、<sup>注3</sup>海軍航空技術廠<sup>しやう</sup>で軍用機を設計した」

木崎は、表情こそぴくりともさせないが、こみ上げるものを押し戻しているようにも見えた。

そしてそれきり黙ってしまった。何かを考えるように、うつむいている。月の光が、木崎の目元に影をつくつていた。

「なんか、すみません」

いたたまれなくなつて謝ると、木崎はやつと顔を上げた。

「いや、大丈夫だ」

自分に言い聞かすように強くうなずき、歩き出した。

④「きみは戦争には？」

木崎の言葉に聡一は不意打ちを食らった。

「……」

胸に切りつけられたような痛みが走った。戦争に行っていないことの、負い目を捨て去ることはできない。戦争は多大な損失を生み出した。人も物も心もずたずたにした。なのに、まったく正当性を見出せなくなってもなお、行けなかった事実が、聡一を責めることがある。「役立たずめ」と。

志願したものの視力が悪く、兵役にはつかなかった。明る性質の聡一のこと、当時は仕方ないとあきらめたものの、傷がすっかり消滅したわけではなかった。戦後の再生のために使命を見出してからも、ふと思いつくことがある。戦死した父や、少年兵となつたまま帰ってこなかった友人たちのこと。そのたび胸が痛む。

「……行っていないません。私は視力が悪いので、徴兵検査に、……受かりませんでした。」

出しづらいつころから、必死に言葉を絞り出す。すると木崎の表情はどこか柔らかくなった。

「そうか。それはよかった」

⑤「よかったですか」

すがるような声が出た。聡一が物心ついたときには日本は戦争をしており、子どもたちはみな、日本の勝利を祈る軍国少年少女だった。聡一も例外ではなかった。戦いに参加して手柄を上げることこそ、人生の目的であると信じていたから、父が出征したときも誇らしかった。いつかは自分も思っていた。

それだけに、成しえなかったとき、聡一は大いに傷ついた。自己嫌悪と劣等感にさいなまれたばかりではない。近所の人が「役立たず」だと噂うわさをしているのも聞いた。

けれども木崎は、そんな自分に「よかった」と言ってくれているのだ。

「よかったですか」

もう一度たずねてしまう。

「ああ、よかった。私は情けなかったよ」

「え？」

にわかには理解できない発言を追いかけるように、聡一も足を速めて追いついた。<sup>注4</sup> 東京帝国大学を出て海軍航空技術廠に入り、爆撃機をつくったエリート中のエリートである木崎に、情けないことなどあるのだろうか。戦争に敗れたことだろうか。

だが、木崎の答えは違っていた。

「本当に情けなかった。こんなに大勢の人が死ぬのなら、軍用機などつくらなければよかったと思った。設計などしなればよかったという思いがこみ上げて、やりきれなかった。できるものなら、自分の過去を消し去りたい」

聡一は戸惑った。

「でもそれは」

必死で言葉を探す。

「仕方なかったことではないですか。木崎さんの責任ではないですよ」

そうとしか言いようがない。日本は戦争をしていたのだ。その中で木崎は職務を全うしただけだ。

「しかし、私のやったことが重大な結果を生んでしまったんだよ」木崎は言った。静かだけれど氷のナイフのような鋭い声だった。

「……」

聡一は押し黙る。

「私を持ちうる技術のすべてを投じてつくった飛行機で、若いパイロットたちが死んでいった。皮肉なことだよ。もっと速く、もっと強く、パイロットの命の危機を高めることになってしまったんだ。速く敵地に着くために軽くした機体が、戦士を危険に近づけることになった。特に、物資が粗悪になった末期の機体はひどいものだった」

吐き出すように言葉をつなぐ木崎の声は震えていて、聡一は恐ろしいような気持ちになる。

「……そんな」

なんとか否定し<sup>⑥</sup>なければと思うが、ふさわしい言葉が出てこない。自分の中には<sup>a</sup>ない<sup>b</sup>のだ。

「木崎さんは悪く<sup>c</sup>ないです」

同じ言葉だけが聡一の口元を上滑りした。

「……すまない」

もどかしい聡一の心中をおもんばかるように、木崎は首を振った。

「きみに聞かせるような話では<sup>d</sup>なか<sup>e</sup>つたね」

諦めるように言いながら、木崎は口角を無理に上げた。

「私はだから、鉄道技術研究所へ来たのだ」

骨の通った声で言う。

「鉄道総局で新しい列車を開発するという話を聞いたときは、これだと思った。飛行機や船では他国との戦争に使うことになりうる。だが、国内の陸を走る鉄道ならば、その心配はない。私は平

和な乗り物をつくりたかった。戦いを生み出さない、美しくて安全な希望の乗り物をだ。自分の残りの人生は、戦後の復興のために、そして平和のために捧げ<sup>ささ</sup>ようと思った」

改めて誓いを立てるように言い、木崎は目を仰いだ。だが、すぐに目を伏せた。自分には上を向くことも許されていないのだというように、聡一はたまらなくなる。

戦争は、人の命だけではなく誇りやアイデンティティまでぐり取るのだ。

「手伝います」

宣言するように言うと、聡一自身も今、やっと許されたような気になった。長く苦しんでいた自己嫌悪と劣等感から、抜け出せるかもしれない。いや、抜け出したい。

「平和を運ぶ乗り物をつくりたいです」

まっすぐに木崎を見つめると、木崎もまたずっと視線を上げた。

⑦ 受諾なのか<sup>⑦</sup>   なのかわからないさみしそうな目をしていたが、歩き出した背中中はちゃんと伸びていた。聡一も続く。

「私も戦争で失われたものを取り返したいと思って研究所に来ました。たくさんの人も物も失われてしまったけれど、なくなった後には、必ず生まれるものがあるはずですよ」

「……」

木崎の大きくて鋭い目が聡一を捉えた。

「すみません。生意気なことを言いました」

「いや」

木崎は少し笑った。穏やかな笑顔だった。

「一緒に美しい列車をつくろう」

空地にひしめくバラックが月明かりに照らされていた。

(まはら三桃「零から0へ」)

注1 零戦：旧日本海軍の主力艦上戦闘機。

注2 桜花：旧日本海軍が第二次世界大戦末期に作った特殊滑空機。

注3 海軍航空技術廠：航空機研究をしていた機関。

注4 東京帝国大学：現在の東京大学の旧称。

問一

—— ①「はばかりれる」、②「曲がりなりにも」の意味として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①

ア 気をつかって遠慮する  
イ 近づかないようにする  
ウ 夢にも思ったことがない  
エ 人目が気になってできない

②

ア 遅まきながら                      イ 間違っている  
ウ 誰がなんと言おうと              エ 不完全ながら

問二

—— ③「聡一は焦った」とあるが、このときの聡一の心情を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が作った模型が実験に貢献したということに自信を持ち、今ならば木崎が携わった戦闘機の設計について聞き出すことができるのではないかと思ったが、それは思い上がりだったことを悟った。

イ 木崎が発した「飛行機」という思いがけない言葉に舞い上がり、聡一は思わず零戦・桜花の名前を挙げたが、それらの開発に木崎が関わっていなかったことを失念していたことに気づいた。

ウ 工学を学んでいた聡一にとって飛行機や、その最先端の技術で作られた戦闘機の開発に関わることは名誉あることであるので、木崎が突然不機嫌になった理由が全く見当つかなかった。

エ 普段の人を寄せ付けない木崎の様子とは異なる和やかな雰囲気にならされて戦闘機の話を持ち出したが、それは木崎にとっては触れてはいけないものであったということを感じた。

問三 ——— ④ 「『きみは戦争には？』木崎の言葉に聡一は

不意打ちを食らった。」とあるが、その理由を説明した次の文の I ・ II に入る語を本文中から三字以内で抜き出して答えなさい。

聡一にとって I は憧れのものであり、それが II と関わるものであるという認識をしていなかったから。

問四 ——— ⑤ 「『よかったですか』」とあるが、このときの聡

一の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 聡一を慰めるために本心でもないことを言う木崎を非難している。

イ 周囲からも自分自身からも苦しめられてきた聡一の心が、思いがけない木崎の言葉で慰められた。

ウ これまで聡一を傷つけた心ない言葉を、簡単な言葉で帳消ししようとしていることが許せない。

エ 戦争に行けなかったことを許せない聡一にとって、木崎の言葉は受け入れがたかった。

問五 ——— ⑥ 「なけれ」と同じ品詞のものを~~~~~a~~~~dか

ら選び記号で答えなさい。また、その品詞名を答えなさい。

問六 ——— ⑦ の   に入る「受諾」の対義語を漢字で答えなさい。

問七 ——— 「質問の途中で木崎の顔から笑みが消え」とあるが、その理由を本文中の表現を用いて、四十五字以内で答えなさい。

自分は戦争中、  技術者であることを思いだしたから。

問八 次の   は桜井さんたちがグループ内で感想を出し合った様子である。それぞれの空欄に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

桜井 この小説の題名の「零」は零戦を、「0」は0系新幹線を意味しているそうだよ。新幹線の開発という戦後復興の担い手として大きな役割を果たした人たちの物語だね。

田原 それにしては木崎の様子が気になるな。小説自体は聡一の目線で描かれているから木崎が何を思っているのかを読み取るのが難しいよ。

中川 そうかな。確かに直接表現されてはいないけれど、間接的に読み取ることができるよ。例えば本文中に~~~~~線をはいた I 「~~~~~」というところからは、苦しい過



去を背負ったまま平和のために身を捧げようとする決意を読み取ることができるんじゃないかな。

田原 なるほど。表情から感情を読み取ればいいんだね。

中川 それだけではないよ。この小説では木崎のⅡの描写からも感情を読み取ることができるよ。

鈴木 この本文の場面は、「月」の描写も印象的だね。夜の情景としてだけではなく、未来や希望を象徴しているように思うのだけど。

桜井 そうすると「木崎は月を仰いだ。だが、すぐに目を伏せた」からは、Ⅲが感じられて切ないね。

鈴木 でも、最後の場面では「空地にひしめくバラックが月明かりに照らされていた」とあるよ。結末はわからないけれど、きっと木崎も救われるのではないかという希望があるように思うな。

Ⅰ ア 木崎の目元に影をつくっていた

イ 木崎の表情はどこか柔らかくなった

ウ 木崎は口角を無理に上げた

エ 木崎の大きくて鋭い目が聡一を捉えた

Ⅱ ア 手 イ 背中 ウ 身振り エ 声

Ⅲ

ア どんなことをしても決して許されることはないという罪悪感の強さ

イ 世の中が平和になってもそこは自分の居場所ではないというひねくれた気持ち

ウ 実現の見込みのない大それた夢を語ったことに対する照れくささ

エ 世間の潮流に逆らっても必ず成し遂げてみせるという強い決意

#### 四 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒など A 勧めけるに、氷魚<sup>ひお</sup>はじめて出で来たりければ、①あるじ珍しく思ひて、もてなしけり。あるじ用の事ありて、内へ入りて、また出でたりけるに、この氷魚の、殊<sup>こと</sup>の外<sup>ほか</sup>に少なくなったりければ、あるじ、いかにと思へども、②いふべきやうもなかりければ、③物語し居たりける程に、この僧の鼻より、氷魚の一つ、ふと出でたりければ、あるじ④怪しう覚えて、「その鼻より氷魚の出でたる

は、いかなる事にか」とB「いひければ、取りもあへず、「この比  
の水魚は、目鼻より降り候なるぞ」とC「いひたりければ、人皆、  
⑤はと笑ひけり。」

〔宇治拾遺物語〕

問一 ――― ②「いふべきやう」・④「怪しう」をそれぞれす  
べてひらがなの現代仮名づかいに直しなさい。

問二 ――― A～Cの主語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 僧	イ あるじ
ウ 氷魚	エ まわりの人々

問三 ――― ①「あるじ珍しく思ひて」の理由として最も適当  
なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 僧に会うのが久しぶりだったから。
イ 氷魚がとれはじめたところだったから。
ウ 来客中に用事が入ることなどなかったから。
エ 僧は酒を断るはずだとおもったから。

問四 ――― ③「物語し居たりける程に」の現代語訳として最も  
適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雑談をしているうちに
イ 法話を伺っていたが
ウ 話を聞いて帰ったので
エ 本を読んでいるうちに

問五 ――― ⑤「はと笑ひけり」と「人」が笑った理由として最  
も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 僧が好物の水魚をたくさん食べるために、口からだけで はなく鼻からも食べようと常識外れなことをしたから。
イ あるじが多くの氷魚を客にもてなすことができたのは、 僧が目鼻から氷魚を出したからだと言ったから。
ウ 僧が退室した際にあるじが氷魚を食べたので、氷魚が好 物である僧とあるじの仲が陰悪になってしまったから。
エ 僧が氷魚を食べ過ぎたことをごまかすために、「最近の水 魚は目鼻から降る」と非現実的なことを言ったから。



二〇二四年度 初芝橋本高等学校 入学試験  
国語科 解答用紙 (A日程)

氏名

受験番号

得点 (記入しないこと)

一 (1) 廉 価 (2) 措 置 (3) 北 欧 (4) 削 (5) ふせつ 2点×5

二 問一 I ウ II エ III ア IV イ 2点×4

問二 ① C ② A 3点×2 問三 ウ 4点 問四 友好的 3点

問五 自分には必要のないものを

平和的  
も可

相手に与えて、自分の必要なものを  
代わりに受けとること 6点

が交換様式Cである。

問六 イ 4点 問七 ウ 4点

三 問一 ① ア ② エ 2点×2 問二 ウ 3点

問三 I 飛行機 II 戦争 2点×2 問四 イ 3点

問五 記号 a 品詞名 助動詞 2点×2 問六 拒否 拒絶 2点  
も可

問七 自分は戦争中、自分が持ちうる技術のすべて  
を投じてつくった飛行機で、大勢の  
若いパイロットたちを殺した 6点

技術者であることを愚いでしたから。

問八 I ウ II エ III ア 3点×3

四 問一 ② いうぐさよう ④ あやしゅう 2点×2

問二 A イ B イ C ア 2点×3 問三 イ 3点

問四 ア 3点 問五 エ 4点